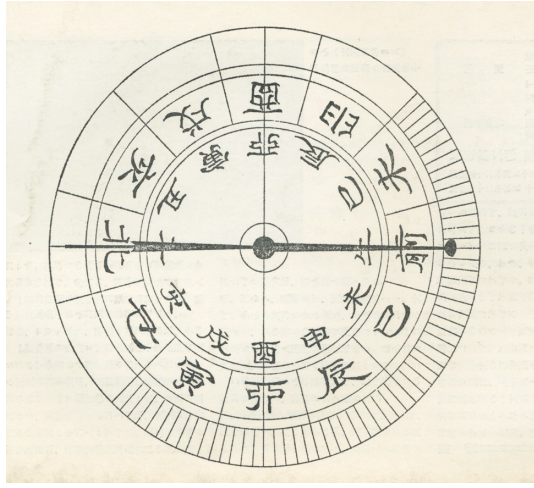


尾形亀之助読書会通信

第二号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

はじめに

二〇一二年三月十七日(土)に行われた「第二回尾形亀之助読書会」には、会場がいっぱいとなり二名の参加者を得て開催することができました。とても、ありがたいことです。参加していただいた皆さんに感謝申し上げます。第二回は、「尾形亀之助の詩論」というテーマで話題提供をしましたが、舌足らずで興行きのない話になってしまい、恥ずかしい限りです。私、小熊の話は、尾形亀之助にとって詩論と呼べる詩の方法論はなかったのだということが結論でした。しかし、何故、亀之助が人の心を惹きつける魅力のある言葉を書いたのかについては、亀之助という人間の個性豊かな資質(物事を感じたり、見知ったときにそれを言葉で表現する感性の豊かさ、そしてそれを「笑い」という第三者の目で写し取るどこか醒めた才能)によるところが大だったとしか言えないのですが、どこまで亀之助の詩を掘っていいっても、その詩の魅力は色あせずに濃くなるばかりです。

次回、第三回の尾形亀之助読書会は、「参加者のみなさんにお知らせしたとおり」に木屋社から出版されている「単独社のおくび」尾形亀之助の著者、盛岡在住の吉田美和子さんをゲストでお迎えして、尾形家の菩提寺繁昌院で開催します。御住職様の快いご理解を得て、本堂内の赤い絨毯の上で、ガラス越しに見える亀之助の墓を眺めながら行いたいと思います。この際なので、尾形亀之助のことで知りたいことや疑問なことなどがありましたら、いっぱい吉田さんに質問していただければと思います。

ております。吉田さんは、亀之助に関する著作以外に、大正期から昭和初期の詩人論(宮沢賢治、吉田一穂、小熊秀雄など)や江戸俳諧を専門領域としております。「海を見ていた放哉」という尾崎放哉に関する著作もありです。話題は亀之助以外のことに流れていってしまうのではなにかと思っております。吉田さんの著作を一つ、二つ、読まれて参加するのも一興かなと思います。

最後に、五月二十七日は、読書会終了後、大河原町にあるイタリアンのお店「モンテ・マール」で吉田さんを囲んで食事会を開催します。会費は、四千元〜五千元と考えております。後日、案内状を送らせていただきますが、是非、食事会まで御参加いただければ嬉しいですよ。

松本俊介の「黒い花」 西田朋

四月十四日、桜はまだの遅い春の気配を車窓に見ながら、私は盛岡の岩手県立美術館へと向かった。「生誕一〇〇年・松本俊介展」を観る為であった。

私は、俊介の今まで出合ってきた作品とまだ観ぬ多くの作品に期待を寄せ、会場に入った。特に、今回は、俊介と同時代を生きた詩人・尾形亀之助との接点も観て見たいという思いもあった。

「俊介の絵が亀之助の詩の絵解きのようなだ」と云ったのは村上善男(一九三三年盛岡生・美術家)である。村上俊介の「街」(一九三八年作)と亀之助の「雨ニヌレタ黄色」(一九四一年作)を取り上げて両者の都会を見つめる眼に、どこか共通の眼差しが感じられると『松本俊介とその友人たち』(一九八七年・新潮社刊)の中で説いているが、実際に絵の前に立った時に、私はその思いを強く感じたのは二点の「黒い花」であった。(今回の俊介展出品作には、同題の作も多くみられた)

黒い花は、共演の埒外に佇んでいた。二点とも三〇号程のものであるが一九四〇年二月に描かれた方は、沈んだ沈んだブルーを基調にした中に黒い輪郭線で線香花火のような黒い花が中央に佇んでいる若い女性と同大に描かれていた。中景には、多くの人物や建物が絡み合っており描き込まれていた。都会で生きていく若い女性は、頼りなく、心細い気持ちを抱えてすくすくと立っているが、孤独感のようなものが伝わって来る絵だった。同年九月に描かれた方は、舟越保武が「夏の夕方の陽が沈む瞬間の紫陽花色の色調は」俊介の時間!だ」と云った。またたくそんな中に前記したようなモチーフが描き込まれていた。私は特に二月に描かれた作品に亀之助の「雨になる朝」を観ていた。静けさと憂いは、たっぷりの水分をふ

くみ、やがて雨になって降り出して来るであろうと想わされた。

このつづきは、八月に宮城県美術館で再会できるのでそれを待ちたい。

ミュージック やまうちあつし

晴れた空なので
青いTシャツを干した。
隣には鳥がやって来て
聞いたことない声で笑った。
通りかかった音楽家は
交響曲を完成させた。
僕はお札を言われた。
翌日そのシャツを着て歩いていると
ビルの入り口でその鳥が死んでいた。
役割がある。

やまうちあつし詩集『YOFUKASHI』について

小熊 昭広

赤や黄や青い色とりどりで、三角や丸や四角の色んな形をした積み木を、何処からか拾い集めて、できあがった言葉達です。一つひとつの積み木は、どれも使い古したガラクタのようです。それらで、できあがった積み木の家(又は時間の塊)の中では奇妙でへんちくりんな世界が広がっています。手が何本もぶら下がっているような巨大な人が現れたり、女王や入道雲が現れたり、宝石を運ぶ音がしたり、夢の中のように、でも不思議と現実感があります。

以上が、やまうちあつし詩集『YOFUKASHI』を読んだ第一印象です。積み木とは、文字通り子供のおもちゃですが、使い込むと手触りの良い、深い光を放ち、大人の道具にもなり得ます。その積み木がどこでどうやって生まれたのか、どうしてそこに存在しているのかについては、作者は一向に説明しようとはしません。ちょっと唐突に現れた物達です。そんなパーツを組み合わせながら、一つの短な物語を語ってゆきます。現実感があるのは、日常に使われる言葉が多くあるせいだからかもしれません。それでいて、できあがった文章は、先ほど書いた「奇妙でへんちくりんな世界」を作り出しています。

シュールレアリスムの全く違う物を組み合わせる手法も見られ
ます。そこから得られる印象は、驚きというものとほよつと違
います。何かを捕まえようとしている意図を感じます。一つの作品が
一つの宇宙を作った、その中にこの世にあるすべての物達を吸い込
もうとする強い求心力が生まれそうです。この奇妙な感覚はどこか
来るのか自分でもわかりません。優しい言葉のようで、堅くなら
秘密を知られることを拒絶しています。どの作品も一ページに収ま
る短編ですが、どれも完結した堅固なお城のようです。ほころびは
見当たりません。それだけ、作者の中で完結した作品達なのだと思
いました。見方を変えれば、どれもこれも、これから始まる物語の
前口上なのかもしれません。その後の物語は、作者も、読者も自由
に泳ぎ回れる心地よい世界なのだと思います。
つまり、現実と非現実(夢)の狭間が「夜更かし」であり、そん
な渾における物語の始まりの挨拶なのかもしれません。
「夜這い」という作品を全文引用します。

夜 地球の上を這う 目的地は 一軒の家屋 家畜のように
這いつくばった 小さな平屋

爪が土を削り しつぽが草花をなぎ倒す 下着をすつかり 汚
してしまふ 何でも捨てる まだまだ捨てる 俺は一番 堅い金
属を持っている 美しいものを 破り捨てるためやって来た 果
てしないものを 笑うために やって来た 君と夜更かしをす
るためにやって来た
いつしか舌が 二つに割れる 天国が 俺を見ている 子ども
の頃に兄と遊んだ 公園を避けていく

詩「夜這い」全文

言葉遊びの要素もあり、とても優しい言葉達が並び、それでいて
不可思議で深遠な世界が広がっています。白日夢のような現実と非
現実との狭間で ゆらゆらと気分が漂います。その世界で気持ちよ
く泳げたらしめたものです。

【浅利正雄小詩集】

別れ・・・練習のために

祖父は少年時代に見送った
秋晴れの濃い空に、ヒワも放って
言葉もはまらない孫の追憶の中に、くつきりと残る鏽鋼の冷たさ
母は逝った、はずだ
そして七年経つのに、いつとはなしにどこからとはなしににじみ出るのは
肥厚した喉の奥が熱くなって、無情の下でわななく「母さん」
タペストリーをつづった友よ、風景よ、絡みついた切れ切れの物語よ、
忘れるわけにはいかない、忘れないわけにはいかな

沈黙を頼りに
少しづつ今日という日に、今日という日に塗り替えよう
その限りまで覚えていよう、覚えていてほしい

子供を残す思いは屈辱的だけれど
不憫だけれど
厚いアクリル板を差し込めば永訣の深淵はほけるけれど
どんな人生になるか見たいけれど
あがきようもないけれど
先に逝つているから
と思う練習しか

夏・・・追憶空間

肌にもまといつくやほつたい日の光
にじむ汗の下でうずく悪戯心

肩越しにちくりちくり張り詰められて、夏到来

白色光がはじけ、清楚な光りに刷毛塗られた大空間の現出
遠い記憶がまぶしい

灰褐色の大地にたわむれ、縦横に踵を滑らす記憶
土地はこりの向こうで茎を揺らしているのは、あつ、あのシャクじやない
か

取りそこねた軋々とするポール
首をかしいで体をくねらせ追う

川面が照っておしゃまにつぶやき、木々が葉裏をすこしよじる
端然として静謐な光景

起きかえるように動きはじめる追想
紡がれる思いを落とさぬよう歩調をとる夏

あした

あしたって何だ
夜中の12時過ぎのこと
あしたって何だ
窓の外のことかもしれない
岸辺を洗う流れのことかもしれない、変転し呼び覚まし
あしたって何だ
地球の機嫌のことかしら
命はあしたを覗く小窓だけど、閉じていたってあしたは際限のない波動

日々雑感

越野 初女(こしの・はつめ)

春は植物が芽吹き、花が咲く季節というのが自然の理(ことわ
り)。今はそれ程ではないが、一時期庭仕事にかなり凝っていたこ
とがある。結婚したの頃、「園芸家(ケ月)」という本に夢中だった。
著者は、チャベック。チエコの作家である。それ以前は貸家の猫
の顔ほどの庭らしきスペースの雑草が伸び放題でも平気だった。い
そそ草取りをした。怖るべし、チャベック先生。

今こそ、色とりどりの花の苗がホームセンターで実物を見て購
入出来る。しかし、当時真の園芸家は種苗会社のカタログで取り寄
せるのが当たり前。欲しい花も種も売っていかなかったのが実情だけ
ど。或いは近所の同好の士と物々交換。歩道にせり出したよそ様の
花の種をちよつと失敬、という誘惑に駆られたことだって一度や二
度ではない。読者を園芸の虜にしてしまう、実に怖るべしチャベッ
ク先生であった。

花には一年草と多年草(宿根草とも言う)がある。前者は一年で
花を咲かせ枯れる草木。対して後者は地上部が枯れても根は残り、
翌年も芽吹き草木。なんだか多年草の方が偉そうだが勿論それはた
だの気のせいである。花が枯れた後、人知れず散らばった一年草の
こぼれ種は冬を耐え、翌年の春に意外な所でひっそりと芽を出す。
その姿のいとおしさと云ったら・・・思わず「頑張ったね」と声を
掛けたくなる、いや実際に掛けるけど。

冬に雪が降る。するとどんなに寒かろうが、先に融けるのは多年
草の根元のぐるりの雪だ。まるで元気に春の支度をしていると訴え
ているかのようだ。おおーっと感嘆の声を上げてしまふ。チャベッ
クは人間も同じだと言う。外目には枯れたように見えても、土の下
に『未来』という名の芽や根が花咲く時を待って忙しく準備してい
るのだと。あれから人生のいろいろな場面、この言葉を噛み締め
る時があった。そして私は今でも花に話かける毎日である。

●あどがき

七月に行う第四回尾形亀之助読書会は、西田朋さんに「雨」というキーワードで
話題提供していただきます。詩集『雨になる夜』の著者が、どのように詩集『雨に
なる朝』を作った、雨に対する親和性が強い、亀之助の詩を語るのか、とても興味
があります。そして、九月の第五回尾形亀之助読書会は、塩電から出ている俳誌『小
熊座』の編集長である渡辺誠一郎氏をゲストにお迎えして、九月一五(日)午後一時
半から亀之助の俳句の話と、それに引き続き「亀之助の俳句会」(勝手な命名です)
を行いたいと思っております。開催場所はまだ未定ですが、可能なら、また繁昌院
で考えております。

今号は、読書会にいらしていただいた二名の方から、詩の作品を寄稿していただ
きました。そして、先日盛岡で開催されている松本俊介展を見に来た西田さんと越
野さんに、エッセイを書いていただきました。ありがとうございます。

最後に、尾形亀之助読書会は会員制なので、取っておきません。一度、参加してい
ただいた方を優先にと思っております。その方のお座りになる椅子は確保して
おります。しかし、当然に、チラシ等を見て、初めて参加したいと思われた方も大
歓迎です。その時には、小熊まで連絡をいただければと思います。席に限りがあり
ますので、連絡はお早めにいただければ助かります。(小熊)

携帯電話 090(5230)2345 メール kaisai@poet.jp

一〇二二年四月二十六日